

Part IV

# 学校をひらく

生徒の修学と進路を保障し、高校生・青年の未来をひらく

—改悪教育基本法の具体化を許さず、  
憲法・子どもの権利条約の理念を教育と地域社会に生かす—



日本高等学校教職員組合

## 発刊にあたつて

安倍自公内閣は、最後まで改正する理由も示すこともできないまま教育基本法を改悪しました。しかし、この間の教育基本法をめぐる国民的論議と改悪案に反対するたたかいが、教育といういとなみは、「国会の『多数意見』で決める」という性格のものではなく、国民的議論と合意を重ねていくものであるという議論のあり方についての国民的な学習運動にもなりました。この歴史的とも言える教育運動は、子どもと教育を守る国民的な共同のとりくみによつて、さらには发展させなければなりません。同時に、これらの国民の教育を守る共同のとりくみは、教育を守り、地域とともに歩む「生徒参加、父母・教職員の共同の学校づくり」の条件を飛躍的に広げており、学校づくりをすすめる上で、確かな土台を築きました。今回の高校教育シンポジウムは、そのことを実感させる貴重な機会となりました。

現在、社会問題化している「貧困と格差」の拡大が高校生・青年を直撃しています。高校生は、経済的理由により安心して学校生活を送り、進学することが困難になつてきています。しかし、「格差社会で『勝ち組』になるか、『負け組』になるかは、自己責任」という風潮が社会的につくられたなかにあつても、生徒・保護者・教職員は、それぞれの立場で、必死の思いで高校生の進路を切りひらこうとしています。

高校・専門学校・短大・大学をでて就職しても、半数は非正規の不安定な雇用がまっています。また、異常な長時間・過密労働がまっています。生徒たちは、このように、高校生活を続ける上で、進路を選ぶ上でも大変な困難を背負っています。私たちは、教職員組合として、このような事態の打開をめざし、多くの関連する団体とも共同して、「修学と進路を保障し、高校生・青年の未来をひらく」という二つの運動を提起し、全国的なとりくみをすすめてきました。このシンポジウムでは、生徒たちが背負つて、この二重の困難をどう解決すれば良いのかを議論し、併せて高校生が置かれているこのような現実をふまえて、高校教育に何が問われているのか、今、高校生にどのような力（学力）をそだてれば良いのかということを大きな軸として議論を深めることができました。

その際に、このような厳しい時代にあつても、生徒会活動をはじめ、生徒参加、保護者・教職員・住民の手による共同の学校づくり・地域づくりに積極的に参加している高校生や、高校統廃合反対の地域ぐるみの共同のとりくみの中で大きな役割を果たした高校生たちに注目し、高校教育の課題を考えることができました。高校生をパートナーとして、「いま、高校生にどのような力（学力）を育てるのか」の議論を深めることができたと思います。

高校生は、一様ではありません。また、多くの困難を抱えています。その中でも、競争社会にさらされ、自己責任論が席卷する社会にあつて、社会的な連帯と共同の価値を育てている高校生は、私たちの希望であると同時に、平和的な国家・社会を担う日本社会の未来として立ち現れています。全国的に広がる高校生のこれらの行動の意味がどこにあるのかの議論を高校生を交えて深めましょう。高校生の身に降りかかる修学と進路問題に、生徒自身が意見表明し、当事者（主権者）として行動する課題についても議論を深めましょう。この報告集を、そのための手がかりとして、大いに活用されることを期待します。

二〇〇七年四月

## 目 次

### 課題提起

生徒参加、父母・住民共同の学校づくりと地域づくり

日高教教文部長 小澤 彰一 2

### 全体会・シンポジウム

「生徒参加、父母・教職員、住民共同の学校づくり、地域づくり」

#### 分科会のまとめ

第1分科会 生徒参加、父母・教職員、地域住民共同の学校づくり、地域づくり

第2分科会 高校多様化、再編問題

第3分科会 学力問題（主権者教育、憲法・平和教育）

第4分科会 子ども・青年の発達課題と特別ニーズ問題

### レポート報告

川口高校における授業改善のとりくみ

（愛知）山田高校教育懇談会 埼玉県立川口高等学校

山田高校教育懇談会のとりくみ

埼玉県立上尾東高校の統廃合問題と今後の課題

（埼玉）埼玉県立上尾東高等学校 長野県高等学校教職員組合

高校統廃合問題に対する長野のとりくみ

（長野）長野県高等学校教職員組合

涙の卒業式から一一ヵ月

卒業生たちは今

（京都）京都府立須知高等学校

主権者を育てるために

（愛知）愛知県立東山工業高等学校

北海道の地域高校における特別支援教育のとりくみ

（北海道）北海道遠別農業高等学校

定時制の現実と課題をもつ生徒の居場所づくり

（京都）京都府立福知山高等学校三和分校

### 開催要項

80

75

70

67

59

54

50

46

42

39 35 30 27

7

小澤 彰一 2

日高教教文部長 小澤 彰一 2

関原 正裕

野々垣 真美

2

日高教教文部長 小澤 彰一 2

谷口 關原 正裕

野々垣 真美

2

日高教教文部長 小澤 彰一 2

谷口 關原 正裕

野々垣 真美

2

日高教教文部長 小澤 彰一 2

谷口 關原 正裕

野々垣 真美

2

日高教教文部長 小澤 彰一 2

谷口 關原 正裕

野々垣 真美

2

日高教教文部長 小澤 彰一 2

谷口 關原 正裕

野々垣 真美

2

日高教教文部長 小澤 彰一 2

谷口 關原 正裕

野々垣 真美

2

日高教教文部長 小澤 彰一 2

谷口 關原 正裕

野々垣 真美

2

日高教教文部長 小澤 彰一 2

谷口 關原 正裕

野々垣 真美

2

日高教教文部長 小澤 彰一 2

谷口 關原 正裕

野々垣 真美

2

日高教教文部長 小澤 彰一 2

谷口 關原 正裕

野々垣 真美

2

日高教教文部長 小澤 彰一 2

谷口 關原 正裕

野々垣 真美

2

日高教教文部長 小澤 彰一 2

谷口 關原 正裕

野々垣 真美

2

日高教教文部長 小澤 彰一 2

谷口 關原 正裕

野々垣 真美

2

日高教教文部長 小澤 彰一 2

谷口 關原 正裕

野々垣 真美

2

日高教教文部長 小澤 彰一 2

谷口 關原 正裕

野々垣 真美

2

日高教教文部長 小澤 彰一 2

谷口 關原 正裕

野々垣 真美

2

日高教教文部長 小澤 彰一 2

谷口 關原 正裕

野々垣 真美

2

日高教教文部長 小澤 彰一 2

谷口 關原 正裕

野々垣 真美

2

日高教教文部長 小澤 彰一 2

谷口 關原 正裕

野々垣 真美

2

日高教教文部長 小澤 彰一 2

谷口 關原 正裕

野々垣 真美

2

日高教教文部長 小澤 彰一 2

谷口 關原 正裕

野々垣 真美

2

日高教教文部長 小澤 彰一 2

谷口 關原 正裕

野々垣 真美

2

日高教教文部長 小澤 彰一 2

谷口 關原 正裕

野々垣 真美

2

日高教教文部長 小澤 彰一 2

谷口 關原 正裕

野々垣 真美

2

日高教教文部長 小澤 彰一 2

谷口 關原 正裕

野々垣 真美

2

日高教教文部長 小澤 彰一 2

谷口 關原 正裕

野々垣 真美

2

日高教教文部長 小澤 彰一 2

谷口 關原 正裕

野々垣 真美

2

日高教教文部長 小澤 彰一 2

谷口 關原 正裕

野々垣 真美

2

日高教教文部長 小澤 彰一 2

谷口 關原 正裕

野々垣 真美

2

日高教教文部長 小澤 彰一 2

谷口 關原 正裕

野々垣 真美

2

日高教教文部長 小澤 彰一 2

谷口 關原 正裕

野々垣 真美

2

日高教教文部長 小澤 彰一 2

谷口 關原 正裕

野々垣 真美

2

日高教教文部長 小澤 彰一 2

谷口 關原 正裕

野々垣 真美

2

日高教教文部長 小澤 彰一 2

谷口 關原 正裕

野々垣 真美

2

日高教教文部長 小澤 彰一 2

谷口 關原 正裕

野々垣 真美

2

日高教教文部長 小澤 彰一 2

谷口 關原 正裕

野々垣 真美

2

日高教教文部長 小澤 彰一 2

谷口 關原 正裕

野々垣 真美

2

日高教教文部長 小澤 彰一 2

谷口 關原 正裕

野々垣 真美

2

日高教教文部長 小澤 彰一 2

谷口 關原 正裕

野々垣 真美

2

日高教教文部長 小澤 彰一 2

谷口 關原 正裕

野々垣 真美

2

日高教教文部長 小澤 彰一 2

谷口 關原 正裕

野々垣 真美

2

日高教教文部長 小澤 彰一 2

谷口 關原 正裕

野々垣 真美

2

日高教教文部長 小澤 彰一 2

谷口 關原 正裕

野々垣 真美

2

日高教教文部長 小澤 彰一 2

谷口 關原 正裕

野々垣 真美

2

日高教教文部長 小澤 彰一 2

谷口 關原 正裕

野々垣 真美

2

日高教教文部長 小澤 彰一 2

谷口 關原 正裕

野々垣 真美

2

日高教教文部長 小澤 彰一 2

谷口 關原 正裕

野々垣 真美

2

日高教教文部長 小澤 彰一 2

谷口 關原 正裕

野々垣 真美

2

日高教教文部長 小澤 彰一 2

谷口 關原 正裕

野々垣 真美

2

日高教教文部長 小澤 彰一 2

谷口 關原 正裕

野々垣 真美

2

日高教教文部長 小澤 彰一 2

谷口 關原 正裕

野々垣 真美

2

日高教教文部長 小澤 彰一 2

谷口 關原 正裕

野々垣 真美

2

日高教教文部長 小澤 彰一 2

谷口 關原 正裕

野々垣 真美

2

日高教教文部長 小澤 彰一 2

谷口 關原 正裕

野々垣 真美

2

日高教教文部長 小澤 彰一 2

谷口 關原 正裕

野々垣 真美

2

日高教教文部長 小澤 彰一 2

谷口 關原 正裕

野々垣 真美

2

日高教教文部長 小澤 彰一 2

谷口 關原 正裕

野々垣 真美

2

日高教教文部長 小澤 彰一 2

谷口 關原 正裕

野々垣 真美

2

日高教教文部長 小澤 彰一 2

谷口 關原 正裕

野々垣 真美

2

日高教教文部長 小澤 彰一 2

谷口 關原 正裕

野々垣 真美

2

日高教教文部長 小澤 彰一 2

谷口 關原 正裕

野々垣 真美

2

日高教教文部長 小澤 彰一 2

谷口 關原 正裕

野々垣 真美

2

日高教教文部長 小澤 彰一 2

谷口 關原 正裕

野々垣 真美

2

日高教教文部長 小澤 彰一 2

谷口 關原 正裕

野々垣 真美

## 生徒参加、父母・住民共同の学校づくりと地域づくり

□国教教文部長 小澤 彰一

### 1 憲法・教育基本法を守り活かす

一六四通常国会に、「教育基本法改正案」・「国民投票法案」などを上程する準備がすすめられ、九月に予定されている自民党総裁交代後の「構造改革」態勢維持のための「行政改革推進法案」もまた上程される見通しです。憲法「改正」に教育基本法「改正」先行の流れがおこり緊迫した情勢になつています。国民の教育権・生存権などを守るべき憲法・教育基本法、戦後日本を支えてきた大きな枠組みが、戦争ができる國の人づくり、もう一つは「構造改革」路線によるルールなき市場原理によつて階層格差を拡大させるという二つの流れによつて変えられようとしています。イラクへの自衛隊派遣、小泉首相の靖国神社参拝問題、構造改革による国民生活の

破壊、アメリカ一辺倒の外交政策は、現憲法のめざす理想から大きく外れ、自民党・小泉政権の異常な特質を示しています。

憲法を変えようとする従来の保守層に加え、日本の財界、軍産共同体となつてゐるアメリカ政府財界からの要請によつてすすめられている改憲策動は、国民との矛盾を深め国民の利益を損なうばかりか、東アジア共同体を構築しようとする国際世論にも逆行するものです。改憲によつてアメリカ追随の軍事同盟強化をめざすことは、東アジア諸国から大きな批判にさらされているばかりでなく、日本国内各界に外交政策への不安を搔き立てています。

しかし、憲法をめぐる緊迫した状況は、国民のなかに大きな議論を巻き起こしています。毎日新聞一〇月の世論調査によれば、憲法九条に手を加えることを六割の国民が反対、二〇代の青年は七割も「改

正」に反対しています。二〇〇四年六月に発足した「九条の会」は全国津々浦々に広がり、団体数として先ごろ四〇〇〇を超えた。職場や地域、同好の仲間など内容も多彩です。戦後六〇年を迎えて、悲惨な戦争を体験し二度と戦禍を繰り返したくないと考える世代は高齢化して数が減り、この時期を狙おうとする改憲派の思惑は外れ、青年層にもイラクから自衛隊が即時撤退を求める運動など、平和を求める運動が大きく広がっています。

一方、憲法を守る運動にとどまらず、「未完のプロジェクト」といわれる憲法の理想を実現する積極的なとりくみもすすめられています。学校では、「憲法・平和教育」が意識的に実践され、その成果は日高教がおこなった「高校生憲法意識調査」にもはっきりあらわれています。教育権・生存権・労働権などは、子どもたちが成育する環境すなわち地域社会が大きな役割を果たし、民主的な人格の形成にも大きく影響を及ぼします。小泉「構造改革」によつて破壊されようとしている地域社会の再生も、住民や労働者だけではなく中小企業家や自営業者なども共同しながらとりくまれています。現憲法の「地方自治」を真に国民のものとして実現することも、改憲反対の大きな国民世論をつくりだす原動力となります。

## 2 教育への「構造改革」攻撃と

### 高校生の動向

日高教が〇四年九月実施した高校生の憲法意識調査によれば、憲法九条によって「日本の平和が守られている」と憲法に対する厚い信頼を寄せる反面、あまりにも厳しい社会状況にさらされているためか、政治・経済について見通しの暗い見方や、社会から拒否されていると感じるか、社会を拒否するといった傾向が少なからずあります。産業界の厳しいリストラ政策、不安定就労の増加、低賃金・長時間労働、増税、年金・福祉の切捨てなどが、高校生の身の回りで具体的に起つています。

日高教が〇五年秋におこなった修学保障調査によつても、授業料・通学費の負担が家計を大きく圧迫していることが明らかになつています。本来ならば、国際人権A規約13条b・c（中等・高等教育無償化）の批准や奨学金の給付制、総合選抜などによる通学費や通学時間の軽減などが教育行政によつて図られるべきです。ところが、教育への「構造改革」政策は、教職員定数の大幅削減、企業資本の参入や企業への業務委託といったNPM（新しい公務経

當)の手法を強引に持ち込み、障害児教育にさえも「受益者負担」と言つてのけるほど理不尽なものであります。新自由主義的価値観によつて、一旦負け組になつたら這い上ることはできず勝ち組になつても決して安心していられない、失敗が許されるどころか徹底して自己責任が追及される社会のあり方を、高校生は肌身で感じて生活していることが推測されます。

一方、あふれるほどの情報が飛び交う現代社会の中で、高校生の価値観や関心も多様化し、若者たちは学校や地域を越えて結びついています。「携帯孤独」や犯罪へ巻き込まれる危険など否定的な側面も指摘はされていますが、こうした情報手段を通じて高校生の意見表明の活動のネットワークも幾重にも交錯して大きく広がっています。

イラク戦争反対の高校生の集会が○三年三月から○五年三月までに四回開催されました。○五年原水禁世界大会は高校生の参加が特に多く各界から注目されました。また、学校統廃合でも、大阪・香川・和歌山・埼玉などの高校生が住民運動と結びついて運動をおこなっています。長野では高校統廃合案に高校生が自分たちの意見を反映させることを求めて

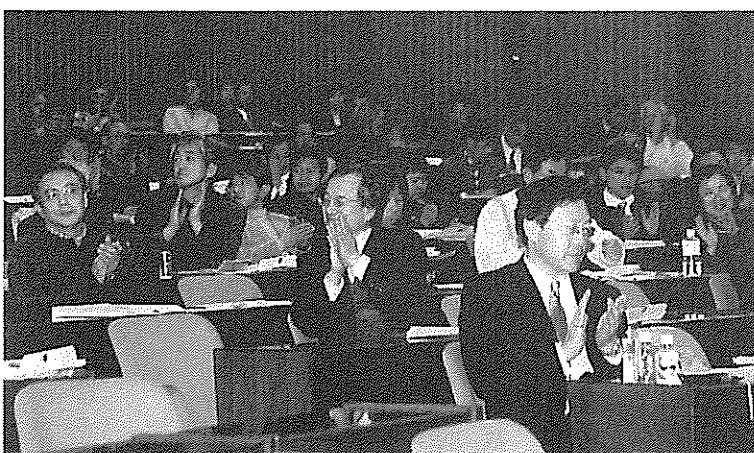
全県高校生集会を開催し、高校生が県教委事務局に直接意見を述べ、県議十数名と懇談をおこない、大きく県民世論を動かしています。

現代の高校は多元化・多様化がすすみ、ひとくくりに表現できなくなっています。そうした高校の中で高校生も格差や文化的分断の中で多様化しているように見えますが、どのように否定的な状況にある高校生であつても、「わかるようになりたい」という学習に対する要求や願望は持つているものです。前述のように「構造改革」によつて多くの高校生が「社会的排除」の憂目にあつてはいるとしたら、こうした政治状況を転換していくことが高校教育にかかるもの重要な運動課題です。高校生のネットワークは、私たちの運動の依拠するひとつの流れともいえます。

### 3 参加と共同の学校づくり

子どもが主権者としての人格を形成する場として、学校が民主的であることは必要不可欠な条件です。子どもにとって学校が、体罰の横行、自分の意志に反する注入的な学習指導、勝利至上主義のクラブ指導など、勝ったか負けたかという競争的価値観に日

常的に曝される場となつてはいないでしょうか。さらに、仲間関係においても「いじめ」「迫害」「虐待」という非民主的な関係が支配し、安心・安全といえない状況になつていなかでしようか。勝つたか負けたか、支配・被支配の価値観が支配する中で、民主的な人格形成はきわめて困難です。



教職員にと  
つても、裁量  
権・研修権が  
制約され非民  
主的な管理強  
化がすすみ、  
長時間過密労  
働を強いられ  
る状況が進行  
しています。  
給与構造見直  
しによる査定  
給がそのまま  
導入されれば  
教職員の同僚  
性、指導の役  
割分担といつ  
たチームワー

クが成り立ちにくくなり、教育全体が困難になります。

近年、日高教・全教が提起し実践がすすめられている「参加と共同の開かれた学校づくり」は、学習権の主体としての生徒、教育権をもつ保護者、専門家としての教職員、それぞれが民主的関係をつくつていくことであり、学校が内側にも外側にもひらくことによって、現代の学校の閉塞状況を克服しようとする教育運動の課題であり、全国各地で多くの学校に広がっています。

三者協議会や学校フォーラムのとりくみの中で、高校生が意見表明の場を保障され権利行使の主体として扱われることによって、大きく成長することが指摘されています。意見を表明しそれが正当に扱われるこことによって、高校生は主権者としての人格および「ことば」を獲得します。生徒間、生徒と教職員、親と子といった人間関係の中に発生し、時には泥沼のようになる個人間の「揉め事」は、多くの場合「怒鳴り声」や「つぶやき」でやり取りされます。三者協議会などの公共の場では、感情むき出しの私的なことばでは通じません。学校三者協議会は、公共の「ことば」で話し合うことによって私的な「揉め事」を公的な問題に転換することができるという仕組みをもつてているのではないかでしょうか。

#### 4 地域社会づくりと結んで

地域社会づくりに大きな役割を果たすことになります。

小泉政権のすすめている「三位一体改革」は、地方財政を圧迫し市町村合併などの合理化を急激にすすめ、多くの地域や住民が「周辺化」されることになりました。一方、都市部においては徹底した効率主義によって住民の生活は窮屈で厳しいものとなっています。弱者切り捨て、階層格差拡大の構造改革によって、失業者・不安定就労は増大し、若者の就職難、庶民大増税によって、大多数の国民は生活の危機に陥っています。市町村合併、学校統廃合など公的サービスの縮減など、地方切り捨ての政策は、経済・産業・文化といった生活の基盤を打ち崩し、集落消滅といった事態さえ引き起こしています。

憲法の基本理念の一つである「地方自治」の方を大きく変えたことは、日本国民が等しく享受できる幸福追求権を奪うものです。自治、産業振興、伝統文化の振興、教育、福祉など、地域住民の生活すべてにかかわる諸問題を、現状認識や政策について話し合い、地域社会を住民の手で再構築し、ネットワークを広げていくことが必要になっています。そのため、地域にある中学や高校は、次代を担う若者を集め人格形成に大きくかかわるものである以上、

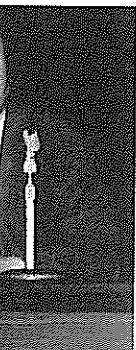
具体的には、地域社会が学校にかかわろうとするとき学校目標も含めた教育課程が議論されなければなりません。学校の全体計画である教育課程の編成権は、校長も含めた教職員にあるものの、生徒・父母に加え、地域社会を構成する人々とも議論を尽くしてそれが教育課程に反映しなければ、教職員による「専門家」支配の誇りを免れません。「学力」とは何かをめぐつて、二者間で押しつけあつたり反目しあつたりするのではなく、三者、四者によつて議論を深めることによつて、その学校にもつともふさわしい「学力観」がつくられていくのではないでしょうか。

学校が教職員・生徒・父母にとつて開かれ、参加と共同の教育空間になることに努めると同時に、その学校は、地域社会のさまざまな運動と結んで、住民一人ひとりが主権者として生きていける地方自治をつくるための一員になることを求められています。そして、地域社会はその構成員である子ども・若者の人格の形成に努め、学校とも密接な関係をもつて教育条件の整備・充実にあたることもまた求められています。

## 全体会・シンポジウム

生徒参加、父母・教職員、住民共同の学校づくり、地域づくり

黒木世津子さん



猪岐英夫さん

大橋基博さん  
コーディネーター



奥井正都さん

大橋 愛知県では、改革を求める動きという点で言いますと、犬山市など教育委員会の指導ですが、学校改革の動きも出てています。さらにまた歴史的に見ていきますと、愛知高教組などが中心となつて父母集会を開催してきましたし、それが発展して父母懇などもいくつかの公立高校でつくられています。さらにまた公立高校父母連絡会というのができる、全県的に父母の交流を図ろうとしている。そういう改革を求める動きというのも着実に出てきています。さうともいえます。ですから今日のシンポジウムでは、そういう動きを愛知県発ということでお示しをして、みなさんからのご意見をちょうだいしたいと思います。それではシンポジストの方のご報告に移りたいと思います。

### 子どもに元気をもらい、続けています

#### 「尾東版・しゃべり場」

黒木 今から高木さんと二人で「子どもに元気をもらい続けています尾東版しゃべり場」というタイトルで、私たちの一、二年間とりくんできた活動の報告をさせていただきます。公立父母連というのは、父母と教職員が共同して開かれた学校の実現をめざし、自主

的にさまざまな活動をしている会です。私は父母としてこの会に一二年間参加をしてきました。尾東地区というのは、名古屋の北東部に位置する地域をいいます。昨年、愛・地球博がおこなわれた地区あたりです。地区の中には一六校の県立高校があります。愛知といいますと管理教育で有名ですが、その愛知の中でもとくに管理がきびしいといわれている地域ではないかと思っています。そういう尾東地区に子どもが一二年前に入学したわけですけれど、その時に自分の子どもが通っていた高校には、何かそういう会がないかと思っていたんですけど残念ながら学校独自の父母懇はなかつたんですね。困ったなあというところで、たまたま今隣にいる高木さんと知り合いました。そして一人の教員とまた知り合いました。本当に一二年前にたつた三人で、なければ自分たちで父母会をつくろうかという、本当に初対面の高木さんと本田先生という三人で、もうつくつちやとうかという、そういうノリになってしまって、私はあれあれっていう感じで、今からつくるのっていう感じではあつたんですけれど、その日にできてしましました。三人の学校が一人ひとり違うものですから、学校ごとの父母懇はつくることができません。どうしようということで、じやあ尾東地区とい

うことが共通しているから尾東地区でつくればいいんじゃないということ、それが尾東地区の父母連の活動の始まりでした。

これから何をやつていこうかということはやりながら考えましょう、という、そこらへんは父母得意の適当な発想でスタートしたわけです。ただ、何々をしなきやいけないというしんどい活動ではなくつて、私たちがやりたいと思ったことをやつて、こうというのを真ん中に置いて、そういう活動を心がけてきました。八月を除いて毎月集まりました。今あらためて計算すると約一三〇回くらい集まつて話をしました。始まりは本当に一日でスタートした感じなんですが、なかなか会員の方は思うように増えません。実際に二人しか会に集まらないなつたということもありました。でも、そういう時も次はたくさん来てくれるんじゃないかなと前向きにのん気に構えて二年間やつてきました。不慣れな父母の進行なので、話があつちへ飛んだりこつちへ飛んだりということはしょっちゅうです。そういう父母に一〇分あれば決まる話が一時間もかかるつたねという感じで、教員もそこはのん気につき合つてくれています。

番大切にしたいと思つていたことは、子どもの声を

聞かせるということと子どもの話にそうだねという感じでやさしくうなずいてあげる、という二点に気をつけました。親もそうなんですが、たぶん先生もきっとそなんだと思うんですけれど、本当にそだねつて素直に聞いてあげるというのは、なかなか難しいことなのかもしれません。先生はとくに何か指導しなければいけないという気持ちが強いようだと思うので、しゃべり場にきて、つい生徒に何かを意識されてしまうのではないかと思うんですけども、そこらへんはちょっと抑えてという感じでしゃべり場をやつています。

高木 十数年間続けていろいろなことを学び、生徒・父母・教職員が少しずつ変化してきました。他校との交流というと部活動ぐらいしか経験のない高校生にとって、いくらここでは何をしゃべってもいいよと言つても、自分の学校の先生も一緒に來ているし、また全く知らない大人の前では最初はなかなか本音は話せませんでした。しかし誰かが話し出すと、日頃の思いが一気に出てきて、とても真剣で目が輝いていました。この会で他校のとりくみを学び、それを参考にして学校を変えるという貴重な体験をした子どもたちもいます。

たとえば自動販売機が認められたり、女子も力一

ディガンを着用していいと校則が見直されたりしました。生徒が始まなければ学校は変わらない、学校を変えるのは自分たちだと気づいた子どもたちです。でも、何かを始めようとする時、後ろでじっと見守ってくれる先生や大人がいないと僕たちは始められない、と言った生徒さんの言葉が心に強く残っています。学校生活を楽しんでいる子どもたちや生徒会活動を活発にすすめている子どもたちの発言からは充実感や自信が伝わってきて、こちらも元気がもらえ、ほっとします。しかし反面、学校や教師、親・大人たちに不信感をもつてている子どもや、学校には何も期待していない子どもたちの発言からは、きっと今までつらい思いをしてきたのだろうと思いまして。学校は居心地のいいところではなく、子どもの意見が大切にされていないところだということを突きつけられたようで胸が痛みます。

次に教職員の変化についてお話しします。生徒会にかかわっていて、生徒指導で何でもわかりあえていたと思っていたが、しゃべり場での発言を聞いて、まだまだぜんぜんわかりあえていないなということを実感したと言つてみました。もう一人の先生は、うちの生徒は何をやらせててもダメだ、何にもできないくつも思っていたが、しゃべり場へ連れて来て、みんなの前でとてもしつかりした発言をするのを聞いて

びっくりし、早速次の年度に生徒会の担当を申し出て、参加した生徒と一緒に生徒会をすすめてこられました。結局、先生の生徒を見る目が変わったのです。最初は参加するのが負担で嫌だと思ったことがたくさんあつた、でも続けてきて今はとても楽しい、と言つてくれた先生もいます。父母ががんばつているからか、それとも何か理由はわかりませんが、最近はたくさんの生徒を誘つて毎年参加してくれる教員、父母にとつては大きな励みになっています。

次に父母の変化ですけれども、前向きな姿勢で大人の前でしつかり意見を述べる子どもたちを見て、また述べられない子どもたちからも思いが伝わってきて、元気をもらっています。子どもを見る目がやさしくなり、ゆつたりとした気持ちで接することができるようになったかと思います。回を重ねていくうちに最初は子どもの声を聞いて子どもたちの思いを学校に伝えるという感じでしたが、いつの間にか子どもたちに学校を変えるのは自分たちという自覚が芽生えてきて、今は教職員や父母は子どもたちのとりくみを見守り励ましていくようになっています。また他校のがんばりを見たり聞いたりして、変わらないだろうとあきらめていた生徒さんの気持ちが今は変えようという目標を持った気持ちに変わってきているように思います。



大橋 どうもありがとうございます。うございまして「三者懇談会の経緯と課題」ということで、奥井正都さんにお願いします。

何番くらいの子が入ってくる。名古屋市内の学校というのは、ひとつの学校の中での学力差が非常に少ないんじゃないかなと思うんですけれども、勉強の面では同じような学力をもつた子が来ている学校です。半分以上が自転車通学ということで、まあ地元の学校なのかなと思っています。緑高校では今年で六回めになるんですけども、よりよい緑高校をめざして懇談会という名前で三者懇談会をやっています。そもそものきっかけは、ちょうど二〇〇〇年に、当時制服を変えようと。うちの学校はできて三五年くらいなんですかれど、それまでは女子は後ろボタンの制服でとても使いにくくし、バスや電車のなかでいたずらされたりということで、非常に女子が嫌がっていたということがあって。男子のほうは昔ながらの学生服で。これはなんとかしようということで話がすすんでいたんですね。それから一方では、新しい教育課程を考えるんだけども、根本的に学校のあり方を変えるようなものができないだろうかということを考えてきたんです。ちょうどそれが、ある程度学校のなかで方向が見えてきたところで、これは一度生徒や保護者に生活実態アンケートをきちつと取って、それを元にして意見を聞く会をもういうのが、第一回の趣旨だったんですね。最初の段階から、これは組合の分会でやるとかいうので、

### 三者懇談会の経緯と課題

奥井 私が勤めているところでは名古屋市立緑高校といって、名古屋の郊外の住宅地にあたる普通科高校です。学力的にも中学校の四〇人のクラスだと十

はなくて、学校の組織として動いていました。だから最初のアンケートの集計であるとか分析であるとかは全部教頭の仕事としてやつていて、それを職員会議で教頭がこういうふうに分析したんだけどどうかねとか言うと、みんなでここんところはちょっと違いますよとかいうやりとりをした覚えもあるんですけれど、そんなふうにして開いたのが第一回の会議なんですね。だから現在でも学校としてのとりくみです。

私は実際の担当をしておりますが、今は総務主任という立場でこの懇談会の企画等をしています。

第一回のいちばん最初に立ち上げた時の感想は、とてもよかったです。参加の人数を見ても第一回がいちばん多いんですね。保護者の方の参加も多い。いつも職員会議をする特別講義室という会議室が本当にあふれんばかりのたくさん的人が集まつたわけです。やつぱりその理由としてはテーマがよかったです。教育課程の話もありましたけれど、実は親の関心はそちらよりも制服のほうにいついていたようで、非常に具体的で。それから教員もいわゆる生徒指導、うちの学校では身だしなみ指導といつていますけれども、思い悩むことが多いわけですし、親も生徒も先生にいろいろなことを言われるし、そんなわけでいつも悩んでいたことですね。それが話し合われるということ、それから事前のアンケートを取つたとい

うこともあって非常に関心があつた。

この会の中身については、PTAとしても詳細な記録を全保護者に渡しています。また、細かい中身についても学校のホームページに出していました。こういう懇談会をするときによく聞くのは、心配事だと思うんですけど、保護者はどんなことを言うかわからない、それから生徒もなにか言いたい放題言うのではないかと。なかには地域の人が出でてきたり回すんじやないかという話も聞いたりしますけれど、結論的なことを言わせていただくと、非常に保護者の方も生徒も常識的な発言をしているなと思っています。ただ、常識的といつても、みなさんが常に良識を働かせてというのではなくて、会として良識が働いているなという気がするんですね。なかなか具体例をあげると際どい中身もあるんですが、たとえば、生徒や保護者から受験指導をしつかりやれという発言があつたんですね。受験指導をしつかりやれといつても、うちの学校の場合は生徒が三年生の二学期くらいから受験対策をしろと言うんですね。だから、だいぶ学校によつて状況が違うかなと思うんですが、そこで親がこんな発言をするんですね。「親としてはいい大学に行つてほしい、授業というのは基礎力だけではなく意欲を高めるのが生きた授業だと思う」「機械的に教えるより先生方の人間性が伝わ

る授業をしてほしい」「生徒たちに将来自分がどうしたいのかという自主性を喚起することが必要だ」「自

主性がつけば進学に対する意識も高まると思う」と。

そういうふうに上手にやりとりができる、とくに服装指導とか頭髪とか授業中うるさいということを言うと、生徒のなかには本当に授業中については迷惑だということを言うわけですね。だから先生もピシッと怒鳴りつけてもいいからやつてくれ、というようなことを発言すると、いやいやそうじやないよということで、上手に保護者の方で話をしてください。あるいは生徒同士で、そんなことを言うけれど先生ばかりが悪いんじゃない、という話をしてくれるんですね。だからそういうなかで、上手に会として意識が働いているなと思っています。

とくに保護者の方はそうですが、生徒も多様なんですね。それから上下関係がないですからね。会社でもそうだと思いますけれど、誰かが言つたらそれには反論できない関係があつたりすることがありますね。そういう関係がないわけですから。たとえば今年度もそうですが、PTAの会長さんや副会長さんが来て発言したりしても、それは違うよって言うんですね。だから、そういう形でやつているということがうまく上手に働いているのかなと思いますが、結論はさつき言いましたけれど、そんなに心

配はいらないなど僕は思っています。

それから教員側の問題もあると思うんですけどもね。管理職というのはわりと行政の方向でも開かれた学校ということを言つていますし、中身はともかくおいておいて、こうやつて外部のことを見くといふのは方向性としてはそんなに否定はしないわけですね。基本的に聞くということに対してもそれなりに納得されていると思うんですね。保護者の方も不満や問題意識をもつている方が出てくるわけで、それを直接、校長・教頭いろんな人がいるなかで発言できるということに関してはすつとするわけです。それから今まで誤解していたんだ、先生は恐ろしく校門に立っているけど実は違ったんだ、教室の中ではこんなことをやつていたんだ、ということをわかつて帰つてもらえる。帰る時に、ああそうだったんですかと帰つてもらえる。

生徒のほうも、いつもは生徒の立場・親の立場からしか先生を見ていないわけですけども、先生もいろいろ困つているんだなということがわかるとそれですつと落ち着くみたいなところがあつて、保護者のほうとか生徒のほうは、わりと受け入れてくれるんですけども、これは僕の個人的な見方かもしれないせんけれど、教員のほうはやっぱりちょっと嫌だつたりするんですね。

たとえば、自分の授業の中身とか指導の中身というものが、なんかオープンにされる。非常に生々しくなってしまうけれど、だれだれ先生と名前を言う場合も言わない場合もあるんですけれど、やつぱり授業の中身に入ってくるんですね。それから指導の具体的なあり方について、生徒や保護者がやつぱり、クレームじやないですけれど、これは困るということを言うわけですね。それに対してやつぱり抵抗感というか拒否感がある。

それから最初に出てきたように、言われたくない、見られたくないという意識がやつぱり働いているようだ。

うな、何かそんな感じがするんですね。本当に僕らが困つて答えられないのに、僕も困っているんですよといふことがなかなか言えない、一生懸命説明をしてしまう。そういうことがすごく気になつているんですよ。だから教員のほうからよく出るのは、マンネリ化しているね、同じことばかりやつてるね、やりにくいね、という声を聞くんですね。

それからもうひとつは、さつきしやべり場の話がありましたが、親は一〇分のことを一時間かかるつて。僕はそれでいいと思うんですね。教員というのは、効率というか段取りをスッキリして話をまとめ上げていくということを考えるわけです。だから、もうちょっと目的をもつて実現してといふこと

とを聞くわけですけども、僕はそうじやなくて、同じ話を何度もぐるぐるしていいと思うんですよ。僕らは話していくと思うんですけど、ついつい保護者の方を外部においてしまって、なんか問題が起きないように、成績のこともそうですが、親に電話をかけるときに、本音で言つてしまえば、後で問題にならないようにやつとこうという発想になつて中身がともなわないんですね。これは何かといつたら、親は文句を言つて来る人だよと思つてゐるからですよね。これは親とか子どもにとつてよくないことですよ。

だから学校というものを考えるときに、教員と生徒を学校と考えるのか、親まで入れて学校と考えるのかということは非常に大事なことだと思つて、そこのところを親まで入れて学校だ、それで教育活動をしていくんだ、という意識をつくつていくことの方が大事なのかなと。そのためには同じことが何度もあってもいいと思うんですね。親や子どもは毎年入れ替わるわけですから。教員は毎年同じ話を聞けば、マンネリ化しているね、もういいんじやないのと思うかもしれないけれど、親は毎年毎年違う人が来るわけで、それでいいと思うんですけど、実は教員のほうはなかなかそれに耐えられない部分があつて、なんとかそこを耐える。そういうなかで、教員の側

も支えられていくんだなということがあるのかな。

これからの課題ですが、ひとつは、そこで話され

たことをどう生かしていくかということをやっぱり考える必要がある。PTA活動もそうですが、あくまでもインプットだよ、中で料理して外に出すのは教員だよ、という意識は、お互いに保護者も生

徒も教員も確認しておく必要があると思うんですね。だから、親がそこで何か言つたから実現するものだ、実現しなきやダメじゃないか、というのではなくて、教員には教員の専門性があるわけですから、その中

で上手に料理をしていく、ということをお互いに確認していくことは大事かな。

それからあと二点。やっぱり教員側にスピードが必要ると思うんですね。生徒や親は三年間で卒業しますね。ほとんど三年生の夏休みを過ぎてしまうともう卒業した気になってしまいます。一年生は一学期の間は右も左もわからぬ。本当に学校のことを考えられるのは考へてみれば一年半かそこらでしょ。なければ、生徒も保護者もなかなかついてきてくれないというところを感じるんですね。とかく、ちゃんと考へようと思ふと何年も練つてとか、一年で決めるなんて拙速じやないかとかという意見も出ますけれど、生徒や保護者の時間の流れに合わせて僕らが考へていくことは大事かなと思つてい

ます。

大橋 どうもありがとうございました。ここから見ていますと、みなさん、うんうんとだいぶ身につまるような反応をされていたなあというのが非常に印象的でした。

それでは最後になりますけれども、猪岐英夫さんから「父母懇談会のとりくみ」についてお話をいただきたいと思います。猪岐英夫さん、お願ひいたします。

#### 父母懇談会のとりくみ

猪岐 六九年に教員になって、父母集会や父母懇の活動の経過のなかでいろいろありましたけれども、それぞれの勤務校でかかわってきました。結論を先に言うようですけども、そういうかかわりのなかで、結構長い時間苦しかったというのが、まあ本音です。なぜ苦しかったか。思い上がりがあつたんですね。自分は学校の代表なんだ、と。子どもたちの勉強とか生活とかそういうさまざまな親のねがい・悩み・要求あるいは学校の教育に対する要望や批判、そういうものを一手に引き受けて、それに応えなきやい

かなと、今思うとそう思います。

ですから、やっぱり苦しかった。それが途中から、僕はもう学校の代表じゃないんだ、一教員に過ぎないし、同じような一親に過ぎないんだ、難しいことがあつたら一緒に考えましょうか、なかなか解決できなければどともに話し合いましょう、という立場でかかわってくると非常に気が楽になつた。まあ、結論じみた話を先にしましたけれども、そんな経過を僕自身はたどつてきたと思つています。

「親として」というところで、最初の子が九三年に高校に入つて、その学校の父母懇に親として参加しました。非常にいろいろ学ばせていただきました。たとえば、その学校の先生は私と違つて、親の発言をニコニコしながらあるいはときには厳しい顔をしながらじいと聞いているんですね。それで親同士の会話にあまりいちいち口をはさまない。かつて僕がやつていたような親と教員の一問一答形式ではなくて、親同士の会話をじいと聞いている。それでときまた、必要があればコメントをする。そういう父母懇活動でした。

この学校の父母懇活動は積み上げがあつてのことなんでしょうけど、会員の名簿がきちっとしているだとか、毎年毎年きちっと年四回の通信が発行され、それは会費を納めているOBの会員にもきち

と配られているだとかいう、そうしたちやんとした体制に驚かされたというか、感心をしました。OBがしゃしやり出て現役の生徒の親をそつちのけにするような参加の仕方はもちろんよくないわけですが、父母懇活動でのOBの参加というのは非常に大事なんだろうと思つています。それは現役のほうから見ればOBの経験を利用するというか参考にするというか、大事なんだろうと思つています。

今もここには親として世話役として参加しているわけですが、正直言つて勤務校での成績を真ん中にした親とのつながりでは見えない、いまどきの高校生の親の様子が学べるとか、本音の親子関係の様子がうかがえるとか、そういう私にとって一教員として一親としての学びの場だなということを思つて参加をしています。学べるなんていうと大げさな言い方になるわけですけれど、子どもの様子、親の様子、教員としてそういう情報が増える場所だなと思っています。真ん中の子が九五年に高校生になつた時、充分に参加できませんでしたけれど、こここの学校は教員が現役の生徒を父母懇の場に連れて来ていました。そうすると、自分の子どもがどういう生徒たちと一緒に高校生活を送つているのかとか、日頃自分の子どもには思つても言えなかつたことを他人の子にあればどうなつてているんだ、これはどうなつてい

るんだと聞くことができる場所を与えてもらつて、ここも非常にありがたかったと思つています。

現在松蔭高校で勤務しているわけですが、八月以外は毎月一回なんらかの集まりをもつています。ここで私の前にかかわってみえた先生からあるいは親

から学んだことは、やっぱり教員と親が対等なんだ、対等だからお互いが思つてることを言い合おうよということですね。猪岐君、あの人、去年言つていたことと違うんじゃない?と先輩教師に教えられました。そう言わるとそらなんですね。昨年言つていたことと今年言つてることと違う。やっぱりどんどんどんどん親も変わっていく。やっぱり大事にしたいのは、親同士の交流ということを主眼にして、親のさまざまな悩みや学校に対する要求を僕がパイプ役として学校に持つて行かなればいいかんのだという、そういう義務感みたいなものはなしにしていくと長続きするなあ、疲れがなくやつていけるなあということを学びました。

普通科高校ということで先ほどの話にもありますたけれど、進学の問題とか補習の問題とかは避けて通れないことです。でも、よく父母懇をやつていると学校はもうちょっと補習を増やせだとかそういう声がどんどん出てくるんじやないかと言われますが、たしかに出てきます。出てきますけれど、一年生か

ら三年生まであるいは〇Bの親がおれば、その話し合いのなかでひとつの中価値観だけではないということが浮き彫りになつて、必ずしもひとつの要求で固まるわけではないということを思いました。だからそんなに心配しなくてもいいと思つています。

もうひとつは、普通科高校として進学の問題とか補習の問題とか出てくるなかで、われわれ教員がどういうよういかかわるかというと、やっぱり今の日本の受験競争のなかで、大学や大学生の今がどうなつていいかということをできるだけ伝えられたいんじゃないのかなと、僕は個人的にはそう思っています。愛知の父母集会がきつかけになつて生まれた大学入試検討委員会やら大学入試シンポジウムにも出かけて行つて、断片的ではありますけれど、いろいろな大学の先生から聞いたものを教室で語り、父母懇で語るということが大事ではないのかなとうことを思つています。

大橋 ありがとうございました。猪岐さんの非常に長いキャリアでいろいろ経験されたことをコンパクトに、そして最後はきちつと決めていただいたと思います。これで四人の方の三つの報告が終わりました。

最初の尾東地区の父母懇は三人からスタートした。

親御さんが二人、そしてもう一人の先生は今の全教副委員長の本田直子さん。ですから本田さんですからぶん、やるか、やらなくちゃいけないわねという軽いノリで始まったのが、ずうつと今のきちんと歴史を重ねてきているということになつていてると思います。

そして、名古屋市立緑高校の二者懇談会ですけれども、報告でも言われましたように、マンネリ化しているからやめようかということもあるそうなんですが、学校行事として位置づけられているので、必ず前年度に学校行事として組み立てる。そうしますと、その時は理念としてやはりあつたほうがいいなという、やめたいなという本音が言えなくて理念が先行してとりあえずきちんと位置づいているということがあるそうです。

また猪岐さんには本当に、教師としてどうしたらこういったとりくみを長続きさせることができるのか、あまり肩に力を入れていると長続きできないんだよ、という、長続きさせる秘訣をお話いただけたのではないかと思います。

それでは、これからフロアのみなさんから意見をちょうだいして、いろいろな交流を深めていきたいと思います。

先ほど一秒ほどビデオに映つちゃった高校生です。尾東版しやべり場には今年初めて参加させていただきました。

私は前期の会長なんですけれど、今うちの学校は行事の改編ですごくもめでいて、先ほどの説明のどおり、結構進学の関係でテストと模試の間に行事なので潰さないと、進学率と生徒の意欲が下がるのではないかということで今たいへんもめでています。そこで私たち生徒会役員は反対側なんですけれども、教員の援助というのは一部しかなくてほとんど皆無で、上層部なんかははつきり言つてありません。他の高校がどのように活動しているかアドバイスをいただいたり、活動の形などを聞いたり、尾東版しやべり場を参考にさせていただきました。尾東版し



やべり場では話のわかる方は来ていただけるんですけど、やはり否定的な考え方の方はどうしても來ていただけないので、私たち生徒側の意見を聞いて、こ

こに来ていただきていなない方が反対側なのかもしないですけれども、ちょっとでも理解して、譲歩して間を探すということをしていただきたいですね。うちの学校の先生はいないので言えないんですけど。今日の話を聞いて、うちの学校のPTAはどうなんだろう、父母連はどうなんだろう、ということを初めて考えさせられました。学校は進学で、大人もそう思つているのかなと思つていましたが、そうではないと見直させていただきいい機会になりました。

長野の辰野高校の宮下です。長野における高校統

廃合と、とくに高校生の活動について発言をさせてください。

はじめに、なぜ長野でそんな新自由主義的な教育改革がすすんでいるのと思われる方がいるかもしれませんので、田中知事における新自由主義について触れたいと思います。知事になるや否や、一二通学区制を四通学区に変えました。そして県の教育委員会の事務局の課長級以上一二名のうち一〇名を行政職に変えてしましました。それから高校統廃合は県立高校八九校を七五校に減らす、定時制二三校を三校に減らす、ということを一方的に発表しました。県民のたたかいは明日詳しく報告しますけれども、

全県民的なたかいになっています。高教組が事務局の「県立高校の存続と発展を願う会」には、自治体の関係者が三八団体、同窓会・PTAが四〇団体加盟して、自治体の首長九名が役員を務めていて、県議会に二回請願を出しました。県教委の統廃合計画白紙撤回、これは県会議員の全員が賛成して採択されました。しかし県教委はまったく耳を貸さずで二〇〇八年度から断行するという態度なんですね。もう一度、そのスケジュールがあまりにも拙速すぎるということで、スケジュールの延期という請願も県議会で二名の県議以外全員の賛成で採択されています。

高校生は、統廃合計画が発表されて、その対象校の生徒会は文化祭でとりくむとか街頭署名をとりくむとか、それぞれやってきています。長野の特徴は、対象校でない生徒会がともに考えとりくんでいるとということです。六月に進学校である伊那北高校の生徒会が文化祭に田中知事を呼んで全校生徒が激論集会をやりました。高校生たちが言つたのは、高校統廃合のことを中学生や高校生にぜんぜん説明していない、説明をしてくれということでした。それから、中学生・高校生の意見発表の場を県はつくるべきだということをずっとと言つたわけです。

そして集会の最後に、知事は、そういうことは県

がすることではなくて君たちがすればいい、それが行動民主主義だ、君たちが集会をやるんだつたら私も出るし県教委も出席する、と約束したんです。ところが一週間後のSPA！という扶桑社が出している雑誌、そこに彼は日記を連載していますけれど、そこになんと書いたかというと、あれは高教組がやらせた文化祭だ、そして高教組が高校統廃合に反対しているのは自分たちの職場がなくなるからだ、と書いたわけです。高校生たちは本当に怒っています。しかし彼は本当にそう思っていると思うんですね。本当にかわいそうな人ですが。生徒たちはこの知事との約束がありますから、集会の企画書をつくって知事に提出しました。

しかし知事からは一度も返答がありません。代わりに県教委から校長を通じて、高校生だけの集会には参加しない、やめなさい、と言つてきました。四ヵ月間、県教委から高校生にそういう圧力がかかりました。しかし、高校生たちは実に粘り強く紳的的に交渉を重ねました。私たちは高教組が後援して集会をやればできるからそうしようよと言つたんですけれど、高校生たちは高教組の後援なしにやりたい、そういうことでついに四ヵ月粘つて一〇月二二日に二五〇人の参加で全県高校生集会を開催しました。県教委からは教育次長以下四名が出席しました。高

校生たちは定時制の生徒の学習権を守ってくれ、三〇入学級を実施すれば統廃合の必要はない、など、すばらしい発言をしました。統廃合の対象校の木曾高校の生徒会長は、教育は机の上じやなくて現場で行われているんだ、とテレビドラマの言葉をもじつて言つてたいへん拍手をもらつていました。

その後、高校生たちは高校生の声を届ける会を結成して、県会議員との懇談会、署名活動、中学生への説明会などをとりくんでいるところです。

一月一日の信濃毎日新聞の一面と三面はこれらの高校生の活動の大特集を載せました。大人たちに大きな反響を呼んでいます。

名古屋市立の高校の教育懇談会の父母で野々垣と申します。今日はこういうテーマですし、ぜひ参加させていただきたいと思つてしまいりました。まずこのテーマの生徒参加というのがいちばん最初にきてるのはすばらしいことだと私は思つています。なにしろ学校というのは、黒木さんもおっしゃいましたけれど、生徒が主役なわけですから、これを一番大切にしていただけたらと常日頃思つています。

今、私も娘が三年生ですので三年間教育懇談会をやっておりますけれど、そのなかで、一緒にやつてくださる先生はとてもフランクにお話していただけ

るんですが、どうもなんかよそからの視点が違うかもしれないなどチラチラ感じてはいたんですが、今シンポジウムをうががつて、どうもこわがられているんだということを、いま知ったんですね。何がこわいのかな、と。そのへんのところをぜひお聞かせいただけたらと思います。私は中学校とかでもPTA総会などでも発言するんですけど、手を挙げるだけでもこわがられるんですね。私は何をけんかを売るわけでもないんですが、父母が発言すると提案とか意見ではなく文句と受け取られてしまう。この感覚がすごく不思議なので、ぜひこわがつてらっしゃる側の「意見をうかがいたい」と思います。

大橋 どうもありがとうございました。野々垣さんからの、父母が発言すると文句を言つていると教員はオートマチックに反応してしまってはしないかというようなご意見が出ましたけれど。

富山の高校の松浦といいます。昨年、学校のほうにいたときに三者懇談会のようなとりくみをしました。今おっしゃられたなかで言うと、保護者はぜひ生徒の気持ちを知りたい、意見を交わしたい、あるいは教員とも話をしたいと言われるわけですが、教員

のなかでやはりそういう話し合いをすることにどうしても、なんでそういうことをするのかとかいうかたちでの抵抗とかがあるのは事実です。そこはやはり、どうしても自分たちの教員の立場とか、それを守ろうとするような閉鎖的な部分があるのかなと思います。そういう意味では、教育というものは全体でつくづいくという意味では、そういうことなしに話し合うことから道が開かれていくというようなことを感じてはいるわけです。

それで私が今ちょっと言おうと思ったのは、先ほど生徒さんの発言もあつたんですけど、愛知のほうのいろんななとりくみでも、生徒会の役員をしておられるような方がわりと多く来ておられるような感じがするんですが、実際に私どもが学校で議論するのは、そういうリーダー的な生徒は比較的いわゆる「いい生徒」が多いけれど、いろいろ問題を抱えたりしているような子たちを含めて学校を、よりよくしていくためにどうするか。あるいは学校の枠を外れていろいろな話し合いをすることもすごくいいことだとは思うんですけども、当該の学校の授業をどうするか、あるいは生徒会をどうするのか、そういうものを学校としてどう変えていくのかとか、愛知の場合の方向性を少し聞かせていただけたらと思います。

先ほどの長野の辰野高校の話は以前に本なんかも読ませていただきたいも、それぞれがもう一回、生徒会や職員会議やP.T.A.の会合に帰つてまた還していくということもとりくんでおられるのは聞いている

わけですが、そのあたりが運動を発展させるという意味でも大切なことかなとも思つています。

大橋 どうもありがとうございます。父母と教員の関係、対応の仕方、コミュニケーションの仕方といふことがひとつと、あと、生徒もいろいろななかで、問題を抱えている生徒、いわゆる優等生以外の生徒も参加して学校を変えるにはどうしたらいいか、というようなことが意見としてだされました。

名古屋市立高校教員の服部です。実は私は緑高校の卒業生です。当時の自分の高校時代の思いをちょっとだけ述べさせていただくと、先生たちはいつも自分たちを集団で十把ひとからげにしてみていて何もしてくれないという気持ちが強くて、テストの午後はのんきにテニスなんかしてゐるなと思つて見ていたんですけど、もし自分が今先生方がとりくまれているようなことを知つていたら、ずいぶん高校に対する印象も違うのだろうなという気もしました。立場が変わると人間はコロツと変わるもので、

いざ自分が教員になつたら忙しい忙しいばかり言つているんですけど、これが口癖になつてしまつたらいけないなと思いつつ、とにかく忙しいというのが実感です。

たとえば授業後はほとんど会議が詰まつているとか、やっぱり生徒が教員に声をかけてくる時というのは、ある意味「一回性」というのか、その時に教員がどういう反応をするかでずいぶん生徒の気持ちも変わつてくるんだろうなと思うんですが、もしその一回を逃したら、もうその子は二度と声をかけてこないかもしれないという思いを抱えながら、「忙しいので、あ、ちょっと待つてね」とか「あ、今から会議なんだわ」と走つて行つてしまつたりするんです。けれど、やっぱり先生方それぞれ話をすることは得意だけれども、人の話を聞くことはそんなに得意でない方も私を含めていらっしゃるのではないかなと思います。やっぱり教員の多忙化ということがいまま大きな問題になつてゐると思うんですけど、そちらへんのことについてお考えを聞かせていただけるといいなと思います。

大橋 生徒とじつくり話をしようとしても多忙でそのためのゆとりがなくて、ついつい、後でねというようなことばを言つてしまふ。そういう多忙化の問題もた

いへん大きな問題だと思います。

山本といいます。三年前に退職をして、今は教育

とは無縁の生活で、岐阜県の田舎町で町内会長をや

つたり九条の会の事務局をやつたり、年金者組合の若手として遊んでいます。結論から言うと、私は今は無縁になっていますが、尾東のしやべり場にもかかわってきたんですが、尾東に限らず、高校生もそうだし、若者はやっぱり社会的な連帯というのを本当は求めている。そのため力を尽くすということ。たとえば地元で九条の会なんかでときどき街頭で署名活動なんかするんですが、ジベタリアンの女子高生やギャングロのお姉ちゃんたちでも、話しかけていくとたいていはやつてくれるんですね。そういうことをみても、本当は高校生も社会的な連帯を求めていると思うんです。

大橋 ありがとうございました。最後にエールをいただけきました。また同時にこれはさまざまな学校の内外のとりくみに教職員組合がしつかりとかまないと、このようなとりくみはできない。ですから教職員及び教職員組合はしつかりとしなくてはいけないなという、そういうエールもあるかと思います。

それでは、いろいろと意見が出されました。それ

ぞれ四の方に今まで出された意見や具体的な回答を求めるご質問もありましたので順番に述べていただきたいと思います。

黒木 みなさんの意見に対し答えるという形にはとてもならないんですけど、今回、しやべり場の報告をと言われた時に、正直言つてすごく迷いました。私たちみたいな本当に小さなとりくみが全国の大勢の方の前で発表できるような大したものではないという思いがあつて辞退しようかなと思つたんですけども、プラスとして考えて、こういううちつちやなとりくみだからこそ、どこかでちょっとやる気になればできるんじやないかなと。そのひとつ参考になればと思ったのと、もうひとつ、私たち父母の思いというのはなかなか先生の前で伝える機会がないものですから、これはいいチャンスと思って。でも一人ではちょっとこわいなというので高木さんと一緒にやろうということで引き受けたという経過があります。

五年前は、私は四つの気のなかで根気・のん気それからやる気という三つの気をもっていました。そこに、しやべり場がとても有意義に育つていって、そこで元気をもらつて四つの気になりました。今回、私は語呂合わせがすごく好きなものですから、勇気

という気が加わって五つの気に増えました。

高木 私もまつたく、いま黒木さんが言われたとおりで、何でも新しく何かをつくるというときはつい、とくに教職員の方はつくる前にすぐ考えます。

さちやうと思うんですね。だから私たちがやつたよう、やってから考えようという先生のアドバイスによつてつくつたんですけども、ぜひ気楽に考えて、ひとつでもふたつでもどこかにできる」とを期待しています。

奥井 さつき心配事ばかり言つちやいましたけれど、いいこともたくさんあるんですよ。さつきの具体的な学校の問題解決については、やっぱりかなり授業とか生徒指導とかという面で言うとしんどい場面が出てきますので、その部分は本当に詰めて考えると、どうか、職員の意識も上手に盛り上げながらやっていくことがすごく難しいことです。それからもうひとつは、僕はとても実はいい環境で教員をやらせてもらつているなと思っています。こうやって学校全体でこういう行事ができるというのも非常に恵まれていると思うし、それからさつきフロアからも発言がありましたが、実は私も緑高校の卒業生で、母校で一〇年間仕事をさせてもらって、生徒

と一緒に毎朝自転車に乗つて通つています。近所には生徒のお父さんお母さんもいるし、うちはアルバイト届出制ですのでスーパーに行けば生徒がレジを打つてくれている。そういう環境のなかで仕事をしています。

本当に、自分の仕事は何かなという捉え方の問題だと思いますけれど、僕はもうここ一年二年の間は、本当に五時になつたら失礼しますと言つて帰ることになります。さぼるわけではなく、五時までにできる仕事を、何が必要で何が要らないのかということを、ある程度切るところをつけて仕事をしています。五時に子どもを学童に迎えに行ってご飯食べさせて、僕は機会があることに親と話すことにしていますので、月に一回くらい七時になると、先生来てよと言われると寿司屋に行ってお母さん三人くらいと先生二人くらいで話ををするというのをやつているんですね。だから、さつきの何で保護者がこわいのという話がありましたけれど、やっぱりひとつは、先生といふうのは一〇〇点満点でないといけないかなと思つて、いる部分もあると思うし、それから何でもそうだと思うんだけど、失敗して直していくと、ううになかなかなつていかない部分がある。それから同じ視線になかなかれない部分があつて、さつきも言ったように僕は子どもを学童に通わせているだけ

れど、先生この前学童でムカデ競争仮装してたねつて親から写真を見せられるんです。そうするといきなり、先生と親ではなくて学童の父母仲間という話になつてしまふ。それですぐ楽なんですね。

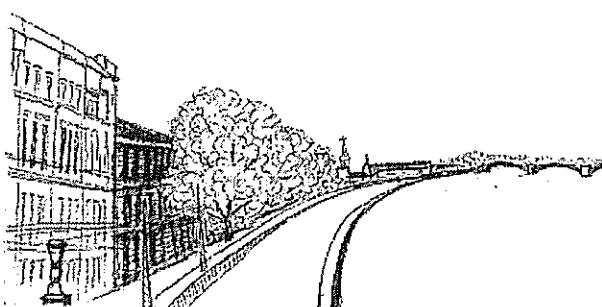
猪岐 今日は恥ずかしいものですから同じ学校の教員には来るなと言いました。明日からの分科会に来てほしいと。その程度の自信しか正直なところないわけですから、先ほどの質問に答えるということといえば、なぜ親がこわがられているか。僕のささやかな四つの県立高校の勤務校で今思ひ返してみると、二つの面があると思うんですね。ひとつは、管理職自身が教員にも生徒にも無理を強いているということを内心わかっている。それは受験競争であり、あるいは生活指導であり。もうこれは出るところに出たらちよつとまずいかなというふうに、かなり無理をしているということが管理職はわかっているんですね。そういうところでは、そういう学校の教育体制をひっくり返されたら大変だという心配があるんじやないでしようか。そういう面と、全く逆の面で、もう愛知の管理制度のなかでへとへとに疲れている教員が、たまたま今はのんびりやらせてもらつてている。そういうところで父母のほうから、先生もつと補習やれよ、もうちよつと茶髪をきちつと取り

締まつたらどう、というのも、またこれも困る。僕の経験からいふと、この二つだというふうに思つてゐます。

いま奥井先生が言われたように、われわれ教員自身がもつてゐる弱さというか、弱点を子どもにも親にも見せたくないという大前提是もちろんありますけれど、今の県立高校の体制の中では二つあるんじゃないかなと思ひながら聞きました。他県の先生がおつしやられた、普通の子じやない子の思いをどういうふうにくんでいるのかという質問がありましたがけれど、僕はよう答えられません。ただ父母懇活動のなかでは、たとえば子どもが不登校になって困つてみえるお母さん、あるいはさまざまな事件を起こして留年をした子どもをもつたお母さんが父母懇に来て、本当にこんなふうで困つているんだ、どうしたらいいんでしょう、というときに、われわれ教員がアドバイスするよりも、大変だねということで同じレベルで聞いてくれるお母さんたちが周りにいるとなると、やっぱり安心してというかほつとしてというか、常日頃の本当に苦労してみえるその苦労が、ちょっとほぐれてくる。それで帰つて行かれると、その繰り返し繰り返しで。父母懇のなかで具体的に、どうしたら不登校がなくなりますよ、学校に目がいつてない生活をしている子をどうする

か、等のお母さんの悩みを聞いてあげるだけでも違つてくると/or>うとを経験しました。

大橋 どうもありがとうございました。これでシンポジウムは終わりにさせていただきたいと思います。愛知でこのようにしぶとく結構やつていて、そいつたところでみなさん方に伝わり、何らかの参考になれば、私どもとしましてはたいへんよかつたと思つております。ただ、タイトルに出ております地域づくりの問題、これは正直言いまして今回の報告では十分に言及することはできませんでした。これは率直に問題というか弱点です。ですからこれは明日以降の分科会でぜひ、愛知の実践に対してもご意見をちょうだいしたいと思いますし、ぜひ深めていただきたい。



## 第1分科会 まとめ

### 生徒参加、父母・教職員、地域住民 共同の学校づくり、地域づくり

第一分科会「生徒参加、父母・教職員、地域住民共同の学校づくり、地域づくり」は、約五〇名の父母と教職員が参加し、父母、地域住民と教職員がどのように学校づくりの共同をつくっていくか、また、評価というコミュニケーションを直接的な話し合いにどうつなげていくかなどについて、活発な話し合いがおこなわれました。

#### 1 「学校づくりの場」をどうつくるか

最初に、愛知から三本の報告①「近畿・東海・関東『定通父母の会』交流会一〇年の歩みから」、②「山田高校教育懇談会のとりくみ」、③「父母と教師の集い」を長年とりくんでいた。①は、教職員との共同で始めた「あいち定通父母の会」が、近畿・関東の「父母の会」との交流の集いへと発展していったその歩みの報告でした。親が活動に参加す

ることで自身が変わつていつたことを報告しつつ、今後の課題として、生徒の声をもつと聞くことが必要だと述べられました。②は、父母と教師が話す場としての「山田高校教育懇談会」の活動の歩みとその特徴についての報告でした。③は、講演会またはシンポジウムと学校別交流会という内容で、二七年間続けてきた、父母と教師の集いについての報告でした。

討論では、PTAが必ずしも民主化されていない愛知の中では、「しゃべり場」が必要であること、また、「生徒参加、父母との共同」がなかなか浸透しない中でも、生徒や父母の要求を出す道筋をどうつくるのかが求められており、その水路としての「三者協議会」の重要性などが話し合わされました。共同研究者からは、今後、「父母懇」をどう広げていくか、ボトムの生徒の要求が上がつてくるような準備をした上で、出てきた要求に対応する「三者協議会」にすることが必要であるなどの指摘がありました。

#### 2 「評価」をコミュニケーションツールとして

次に、④「川口高校における授業改善のとりくみ」（埼玉）と、⑤「教員評価・学校評価・授業評価」（青森）の二本のレポート報告がありました。④は、

○五年度から埼玉県の全県立学校で導入された「学校自己評価システム」の中の評価項目である授業改善にかかわって、授業評価を「参加と共同の学校づくり」「開かれた自己評価」の観点に位置づけてとりくんだ報告でした。そのポイントは、授業アンケートを個々の教員の授業の良し悪しをチェックするためのものではなく、教科で話し合う素材として位置づけたことがあります。⑥は、大湊高校で実施している教員評価・学校評価・授業評価についての報告でした。



### 報告

埼玉の「学校自己評価システム」では、生徒代表、保護者代表、学校評議員、校長などで構成する「学校評価懇話会」といふ組織をつくり、双方的な協議によって評価活動をおこなっていますが、それにかかわ

つて、生徒代表が事前に生徒同士で話し合つて「学校評価懇話会」に参加しているのか、授業アンケートの結果を生徒に返して話し合つているのか、などの質問が出されました。それに対して、生徒会執行部にアンケート結果を事前に渡し、話し合つて「学校評価懇話会」で意見を出してもらうようにしていふ、またそこでの内容は記録して保護者と生徒に配布している、まだ組織的になつていながら、「学校評価懇話会」への参加を生徒会活動のスケジュールの中にどう位置づけるのか、また生徒が「学校評価懇話会」の中でどれだけ自由に発言できるかがカギであるとの回答がされました。

討論では、「職員会議でいろいろ議論し学校の課題を明らかにしているが、年度末反省の議論をいかにきちんととするかが問われている」（北海道）、「人事評価制度に対し、「開かれた自己評価」を対置しているが、集団的に論議することが私たちの砦ではないか」（埼玉）、「学校経営計画書」の中などでどれだけ私たちの要求を取り入れるかが大事」（静岡）、「親も集団で論議できないと……。親が力をつけていくことが大事」（愛知・父母）、「三者協議会で学校教育目標をつくろうと議論するが、教員が冷ややか。査定昇給には管理職からも不安の声があがつていて」（香川）、「教員評価について先生方の悲鳴が聞こえてく

るよう。三者協議会の中で生徒の意見が第一だと思つていたが、先生の思いにも共感することが大事だ

と思つた」（和歌山・父母）などの意見が出されました。

そうした意見を受けて、最後に、共同研究者から、「教員と保護者がつぶやく場がないと、（そうした場も含めて）集団的な論議で学校目標をつくっていくことが大切。対話をする中で、評価をコミュニケーションツールとして見ることを忘れてはいけない」「学校づくりのための共同をしていくとき、大切なのは子どもを真ん中に据えること。子どものポジティブなものを見ようとする大人の目が重要である」となどの意見が出されました。

「参加と共同の学校づくり」は、着実に前進しています。質疑・討論を通じて、参加者がそのことに確信をもつことができたと思います。

### 《討論の柱》

(1) 高校生の発達課題とともに、住民の参加する共同の学校づくり、教職員や生徒の参加する地域づくりを双方向的にとらえ、論議する。

(2) 参加と共同の学校づくりの視点から、学校評

価・教員評価問題を考え、各地の状況を交流する。

(3) 学校三者協議会、学校フォーラムなど、父母・住民の視点から考える。

#### 司会

関根 達男（埼玉）

米山 幸治（大阪）

#### 共同研究者

中田康彦（一橋大学）

大橋基博

（名古屋造形芸術大学）

#### 《レポート》

- ① 近畿・東海・関東「定通父母の会」交流会  
一〇年の歩みから 馬場 末春（父母・愛知）
- ② 山田高校教育懇談会のとりくみ  
野々垣真美（父母・愛知）
- ③ “父母と教師の集い”を長年とりくんできて的場 香磁（愛知）
- ④ 川口高校における授業改善のとりくみ  
関原 正裕（埼玉）
- ⑤ 教員評価・学校評価・授業評価  
片桐 拝（青森）

## 第2分科会　まとめ

### 高校多様化、再編問題

#### 全体会・A分散会

(1) 構造改革路線による高校再編問題を、高校統廃合、多様化再編、通学区撤廃などから、全国各地の状況を交流し、問題の本質を明らかにする。(2) 高校再編に反対する運動における高校生・父母・住民の自主的なとりくみを交流する、の二つを討議の柱として、一日目の全体会では四つのレポート、二日目の分散会では一本のレポート報告にもとづき討論がおこなわれました。

◇レポート ①中学校の立場からみた高校入試・高校再編の問題点

愛知県の高校入試では、本来は進学率の引き上げを目的とした「計画進学率」や、「四回の受検チャンス」がある「複合選抜制度」が、現実には中学生に

競争を強制し、第一志望校への進学率を低下させるものとなっています。愛教労は、「進路・進学対策部」を立ち上げ、「中学生の進学希望の保障」「全国最低の高校進学率の引き上げ」など、高校入試問題の解明と改善にとりくんできました。「受検機会の複数化」によって、何度も不合格を経験した生徒たちと、いわゆる「困難校」がつくりだされ、そうした学校が「県立高校再編整備計画（第Ⅰ期）」（〇二、〇六年度）の「再編」の対象となっています。「競争主義教育」を克服するために、いまこそ「希望者全入」と「選抜を実施しない中・高接続」を真剣に議論することが重要であることが確認されました。

◇レポート ②「定時制の灯を消さないで」首都圏集会で成長し合う生徒たち

二〇〇四年二月、定時制高校の生徒・父母・教職員らでつくる実行委員会が主催する「夜間定時制高校の灯を消さないで！首都圏集会 in 茨城」が、約一〇〇名の参加で開催されました。実行委員長は、前年七月の埼玉集会にも参加し、全国の定時制高校統廃合の現状を学んできた生徒が務めました。シンポジウム、高校生によるロツクソーラン、自主映画、創作劇など多彩な企画が盛り込まれた集会は大成功。社会参加と自己アピールできる居場所を見出した生徒たちは、自信を回復し、人とつながり成長し合う

#### 全体会　一日目

#### ◇レポート ①中学校の立場からみた高校入試・

#### 高校再編の問題点

ことの心地よさを学んでいきます。「四角い教室がまるくみえるぐらい温かく感じた」「夜間定時制は、人生のやり直しができるところ」など、生徒たちのことは、定時制高校が「回り道しながらも成長してゆくことができる制度的な保障」(〇四年七月、東京集会「共同アピール」となっている)があらためて証明されました。

◇レポート ③埼玉県立上尾東高校の統廃合問題と今後の課題

〇四年九月、突然、新聞報道で上尾東高校の統廃合が発表され、生徒へは、校長から校内放送で報告されました。生徒会本部は、「上尾東高校を残して欲しい」と運動を開始し、県教委の説明会での意見発表、「上尾東・伊奈地区の高校再編を考える会」主催の市民集会での報告や構成詩による訴えなどを通じて、さまざまな人々からの励ましをうけます。県教委と上尾市に対する署名運動を展開し、集まつた署名用紙の厚みと重さに、いろいろな人々の思いを背負つて実感します。校内でも署名活動、生徒総会での報告と訴えにとりくみますが、〇五年一〇月に募集停止が決定します。脱力感・空虚感に襲われながらも、生徒たちは、①高校生の意見を堂々と表明できること、②「学校の存在意義」を確認できること、③高校生自身が自分たちの母校を創

り上げていく必要があることを活動の成果であったと述べています。いま、上尾東高校の生徒会本部は、「学校評価懇話会」への参加を通じて、生徒の意見表明による学校づくりをめざして活動をしています。

◇レポート ④高校統廃合問題に対する長野のとりくみ

長野県では、二〇〇四年一月以降、「高校改革プラン検討委員会」、四通学区との「推進委員会」で高校統廃合問題が検討されてきました。二〇〇五年六月、県教委が、学校名を記載した「再編整備候補案」を公表したことを見つかりに、反対運動が大きく広がっています。高校との「存続させる会」や生徒会などの運動に加え、長野高教組が事務局をつとめる「県立高校の発展と存続を願う会」(自治体、同窓会、P.T.Aなど七八団体で構成)が、「拙速な教育的な県民参加の議論」をと主張し、県教委への申し入れや県議への請願など全県的な運動を展開してきました。また、高校生たちは、対象校ではない生徒たちが中心となつて、一〇月に独自の「全県高校生集会」を二五〇人の参加で成功させました(集会のチラシの見出しへ「高校生、起立」)。「学校を残したいという運動に政治的な立場など関係ない。高教組の力が必要なのだ」と語る「願う会」の代表世

話人、「県立高校は県民の財産、高教組も県民の財産」としみじみと話す高教組の副委員長。長野の運動の到達点を示す報告でした。

#### 〈分散会A〉二日目

◇レポート 今 あらためて問う、地域と学校

#### ～地域高校調査パート2～

長野県では、学校組合や市町村が創設した「地域高校」が、一元的な学力競争が全国で進行するなかで、「村を捨てる学力」を要求され、地域性の「保持」と「離脱」の両極の間を揺れ動きながら、生き残り競争に参入させられていきました。長野県の高校教文会議「教育史・教育法」研究会は、〇四年度以来、県内の地域と地域高校の調査活動をおこない、地域の再生・存続の営みと学校づくりの努力が表裏一体であることを確認してきました。調査対象となつた高遠高校（〇四年度）では、かなりの生徒が「地元に帰つて、仕事を得て暮らしたい」と答えたのに対して、白馬高校（〇五年度）の生徒の答えは対照的でした。主要産業である観光業に未来がない白馬は、生徒たちにとつて「帰つてきたくても来られない」ふるさとであるのかもしれません。だからこそ、出て行かなければならない「都会」のことをよく知っている教員に進路の相談をする割合が高いという

#### 〈討論〉

討論では、学区拡大や入試制度の変更を梃子にして、全国各地で一方的に高校の多様化・再編が推しすすめられている実態が報告されました。経済的な効率が優先され、自治体合併や「教育の企業化」の動きとあいまって、山間部の高校や夜間定時制高校が統廃合の対象となつている状況が浮き彫りとなりました。その一方で、統廃合に反対する運動のなかで、「地域がつくる学校」「地域をつくる学校」という視点があらためて問い合わせられています。

経済的な効率にもとづく競争原理に対抗していくためには、教職員、保護者、生徒、地域住民、自治体関係者などの人間的な共同を創り出していくこと、地域（基礎自治体）において、「格差づけではない学校の役割分担」を構想していくことが重要であることが確認されました。

## B 分 散 会

共同研究者の勝野正章さん（東京大学）から、前日の第二分科会全体討論の経過とポイントが報告されました。第一は、高校統廃合に対抗する運動や教育活動として、地域にとって本当に必要な学校であるかどうかの視点です。教育の論理がないがしろにされ、財政効率が優先される状況下では、地域の学校存続は地域で決めるという考え方から、場合によつては、地方分権化や財政委譲の方法も考えられます。その際、学校エゴや地域エゴを乗り越えることが大切です。万一本校廃合された場合でも、地域が学校とかかわることで視野が広がり、諦め観・虚脱感を乗り越え、達成感を得ることができます。高校生の躍動ある活動や教職員・保護者のがんばりが、いくつかのとりくみから報告されています。

第二は、高校入試改悪や高校再編がすすむ中で、意図的に「負け組」がつくり出されている状況です。多様化路線が推進され、必ずしも生徒の実状に合わない教育課程が編成される中で、学校に期待できず去つて行く子どもたちを「総体」として捉え、育てる観点が大切です。

レポートは「地域の高校の存続を求めて」『県立高等学校再編整備基本計画』のとりくみと経過」と題して、愛高教の佐藤道洋さんからでした。概要は①統廃合計画（二〇一〇年までに七高校と四校舎（分校）を廃校にする）②多様化の促進（現在五校舎ある総合学科を一〇校に、情報活用・福祉実践・自然探求コース等、コース制の設置拡大をおこなう）③定時制の統廃合（夜間定時制の募集停止、複数部制の「ステップアップハイスクール」を設置する）④障害児学校対策（養護学校高等部を高校に設置する）です。これらの問題点を追究し、県や自治体に働きかけ、地域やマスコミ等へ宣伝行動をおこなっているとのことです。統廃合反対の運動は、進路・進学問題（愛知県は九年連続高校進学率が全国最低）にとりくんでいる愛教労の運動に連動しています。県の計画進学率がなぜ低く設定されているのかの質問に対しても、管理教育（勉強しないと高校に入れないぞ！）に使われたり、全日制の感覚で親が専修学校を選ぶからではないか、とのことでした。総括討論では、各県から同様の統廃合の実態が報告されました。名古屋大学に留学している高校教師ムルニさんから、「母国インドネシアでは学校が不足しており、日本の状況は米国に似ている、日本は学習指導要領が統一されているので、子どもを地域に生き

る主権者として育てることは不利になつてゐる、少子化の中で教育の質をどう保障していくかが大事だ」との指摘がありました。

### 『討論の柱』

(1) 構造改革路線による高校再編問題を、高校統廃合、多様化再編、通学区撤廃などの問題から、全国各地の状況を交流し、問題の本質を明らかにする。

(2) 高校再編に反対する運動における高校生・父母・住民の自主的なとりくみを交流する。

### 『レポート』

① 中学校の立場からみた高校入試・高校再編の問題点 三浦 明夫 (愛知)

② 「定時制の灯を消さないで」首都圈集会で成長し合う生徒たち 飯塚 忠 (茨城)

③ 地域高校調査報告パートII、今改めて問う地域と学校 宮本 和夫 (長野)

④ 高校統廃合問題に対する長野のとりくみ  
「高教組の踏ん張り、「願う会」の活躍、

高校生の躍動 増原 育也 (長野)

⑤ 地域の高校の存続を求めて 佐藤 道洋 (愛知)

⑥ 埼玉県立上尾東高校の統廃合問題と今後の課題 福本 久子 (埼玉高校生)

### 共同研究者

太田 政男

(大東文化大学)

勝野 正章 (東京大学)

学力問題〈主権者教育、憲法・平和教育〉

1 生徒の現状から発した主権者教育

何を伝えたいか、どうして伝えるか

① 平和的な国家及び社会の形成者としての学力とは何か、② 高校生の学習権を保障する立場からの実態把握はどうなっているか、③ 青年の雇用の

実態から、生徒に育てるべき力とは何かの三点について、話し合いました。大学生や海外からの参加もあり、会場いっぱいの参加者で熱心な議論がおこなわれました。参加者は、二八日六四名（全国三二名、愛知三二名）、二九日四六名（全国一九名、愛知一七名）でした。

以上を受けて、今、教育現場では何を高校生に伝えなければならないのか、また、教育課程のどの部分でそれを実現していくのかが議論されました。子どもに伝えるべき内容は、憲法・労働基準法等の労働法規、労働争議への対応や考え方、働きやすい職場や環境をつくるための社会的・政治的なとりくみ等数多くあります。しかし、一部の職業高校を除いて、この学習が学校全体で意図的にすすめられる例は非常に少ないという理解のもと、「日本の『労働市場』が大きく変化している今こそ、主権者としての教育を本気で考える必要がある」という意見が

2 日本の『労働市場』が大きく変化している  
今こそ、主権者としての教育を

二八日、前半は討論の柱「高校生を含めた青年の雇用の実態から、生徒に育てるべき力について考え

る」の議論を深めました。大阪の林さんは今年度の就職・雇用状況を詳細なデータをもとに説明し、この実情が日本の将来にかかる大問題であり、その原因を探りながら解決のため教育課題にとりくまなければならぬと報告しました。京都の原田さんは就職した生徒を追いかけて知り得た、彼らの長時間労働や労働基準法違反横行による過酷な労働現場、現況を報告。そしてそのかかわりから見えてきたことは、現実に対し無力な卒業生、彼らの抱える課題の多さでした。愛知の吉田さんは、「人間らしく働き、生きる力は高校生にこそつけるべきである、主権者を育てるために憲法と労働法を生徒の手に」と訴えました。

出されました。



教材や、さまざまな時間における実践例が紹介されました。また、できるだけ早く具体的に実施に踏み切ること、個人の実践から学年、学校全体に広げていく必要があること、教師自身が学ぶ姿勢をもつ

必要があることなどとなどを確認し合い

ました。

北海道の赤松さんは、連携型中高一貫教育の指定を受けたことを機会に、連携三中学と共同してスリランカに井戸をつくる募金活動にとりくんだ実践を紹介しました。支援募金の必要性の学習や、地域に協力を広げるとりくみを通じて、受け身的だった生徒が積極的な姿勢をみせます。

群馬の中東さんは、総合学科六年目を迎えて、生徒との対話の場を増やし、学年通信などで生徒との「広場」づくり、総合的な学習としての沖縄旅行などにとりくんだ実践を報告。

社会は変えられない、変えようと思わない若者、一八歳選挙権を望まない高校生が増えている現状を

### 3 社会は変えられない、 変えようと思わない若者、

#### 主権者としての学力とは何か

山口の石田さんから山口県における高校生憲法意識調査の結果についての報告がおこなわれました。

安保や自衛隊を評価する回答は、山口では全国結果に比して多く、また県独自でおこなった米軍基地に関する意識調査でも、「戦争の不安」が突出している岩国市で必要性を認める生徒が一番多かったということです。現実と向き合うなかでの矛盾の表れともいえます。

ふまえた主権者教育、生きた憲法・平和学習の必要性が議論されました。

#### 4 モチベーションを高め、

##### 学習を定着させるための

##### さまざまな工夫がおこなわれている

二九日は、学習内容を定着させるためのとりくみが、現場でさまざまにおこなわれていることを感じさせるレポートが二つ報告されました。

愛知の小島さんは、九八年～〇五年にかけて訪れた沖縄・韓国・中国等でのフィールドワークの教材化を報告。生徒の感性に訴える生きた授業が展開できた経験を報告されました。

京都の前川さんは、カタカナ語を漢語に言い換える授業を紹介。工業高校でのことばの学習において、語の概念を如何に定着させるか、ゲーム感覚も取り入れて工夫した楽しい授業の紹介として興味深いものでした。「ことば」にこだわって今後の発展も期待される発表でした。兵庫からは、総合選抜にかかる、「競争で学力は伸びない」との、力強い報告がありました。

共同研究者の植田健男さんは、学ぶことに対して否定的な大学生の現状と価値ある経験の大切さ

が報告され、それぞれの学校の生徒の現状と、予想される将来の生活を視野に入れて学習目標を設定することが必要だと指摘をいただきました。

また、依田有弘さんからは、「いわゆる『困難校』などの負の遺産を持つて入学してくる生徒も競争と無縁ではなく、積極的に何かをする力を持たせ、自信を回復して卒業するようにしてやるのが教育だ」との助言をいただきました。

#### 『討論の柱』

(1) 平和的な国家及び社会の形成者の学力とは何か、主権者として必要な学力とは何かについて議論を深める

(2) 近年、構造改革路線によつて脅やかされている高校生の学習権を保障する立場から、実態の把握と、運動交流をおこなう。

(3) 高校生を含めた青年の雇用の実態から、生徒に育てるべき力について考える。

司会

茶谷 淑子（滋賀）

松浦 晴芳（富山）

田村 儀則（青森）

小島 俊樹（愛知）

前川 幸士（京都）

共同研究者

依田 有弘（千葉大学）

植田 健男（名古屋大学）

⑧カタカナ語の濫用と高校生の学力問題

⑦スタディーツアーの教材化について  
—『満州国』支配の実態を伝える

### 『レポート』

①高校生の就職問題から見えてきた教育課題

林 萬太郎（大阪）

②涙の卒業式から八ヶ月。卒業生たちは今

原田 久（京都）

③主権者を育てるために

—憲法と労働法を生徒の手に

吉田 豊（愛知）

④山口県における高校生憲法意識調査の

結果について

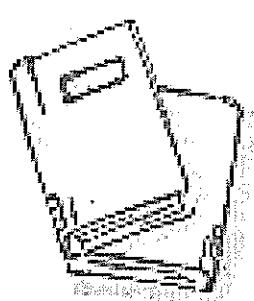
石田 高士（山口）

⑤スリランカに井戸をつくろう

赤松 貴司（北海道）

⑥『総合学科における学力について』

中塚 作蔵（群馬）



## 子ども・青年の発達課題と 特別一一・八問題

「通信」で問題を投げかけたり、学習支援研究会議を立ち上げて学校としての支援の検討をすすめたりしているということです。

本分科会には、定時制、全日制、通信制高校、障

害児学校の教職員、そして保護者の参加があり、四本のレポート報告にもとづいた活発な質疑・討論がおこなわれました。

京都の谷口さんと北海道の菊地さんの報告は、いずれも定時制高校からのものでした。「定員内不合格は出さない」という道・府教委の強い指導の影響もあり、LD、ADHD、高機能自閉症などさまざまな発達的課題をもつ生徒が多く進学している現実、その生徒たちへの指導上の問題点や課題がだされました。

谷口さんは、高等学校では同一教育課程・授業・評価が原則であるために具体的なとりくみが困難な中、多様な課題をもつ生徒を正面から受け止めて担任としてとりくんでいる内容が報告されました。問題やトラブルが起きたときに、学級通信（「コペル

菊地さんは、軽度発達障害をもつ生徒へのとりくみの課題として進路実現に向けた教育内容をつくること、地域の関係機関と連携をとつてトータルな支援をすること、社会と学校をつなぐネットワークをつくることが今後の課題であると提起されました。

北海道の関原さんの報告は、何らかの特別な支援を要する生徒が約一〇%在籍している農業高校でのとりくみでした。関原さん自身がキーパーソンとしてかかわったアスペルガー症候群の○さんへのとりくみとともに、高等養護学校の「地域支援部」との連携や校内でのサポート委員会設置など、高校における特別支援教育のとりくみの成果と課題が報告されました。担任や担当に任せてしまうのではなく、学校としてどうとりくむかを示唆するものでした。

研修で教職員間の障害理解が深まっていることや専門機関との連携がすすんでいることなどの成果があると同時に、大きな課題としては学習指導の体制ができていないうことがあげられました。

また、専門的人員や予算の増加がない中、実際は現状の人員と予算の範囲内で対応するしかなく、生徒をサポートしきれない事例がどうしてもあるとい

うことが、現場の限界として語られました。

三本のレポート報告を受けて、①彼らにどんな力

をつけるか

(育ててい

くか)、その

上で評価や

進級をどう

するか ②

学びの場を

どう保障す

るかを柱に

して討論を

すすめまし

た。「目の前

にいる生徒

の実態に合

わせた教材

を自分で作

つて いる」

「生活に根ざ

した視点を

大切にして

いる」「彼ら

にとっての

基礎学力とは何かを考えたい」「教科指導か社会に必要な力の育成のどちらに視点をおくか悩んでいる」「軽度発達障害の子どもは、学力の問題とはちがう課題をもつて いる」など、さまざまな疑問や意見がださされました。

愛知の新井さんは、愛知の障害児学校のマンモス化解消と、見晴台学園のとりくみが報告されました。特に、軽度発達障害のための高校である見晴台学園のとりくみは、「居場所づくり」にとどまらず必要なカリキュラム・授業を準備すること、そしてより長い教育期間が必要であることから専攻科設置の運動が広がりつつあることなど、彼らの学びをどう保障していくかの視点を提起する貴重なものでした。討議の中では、愛知や埼玉の高校の中に養護学校高等部の分教室を併設する動きがあるが、担任だけの配置にとどまるなど条件整備が不十分なまますんんでいることが指摘されました。

共同研究者の杉浦さんより、①“できる・できない”で子どもを見てはいけない ②働く力や能力については、小手先のスキルの獲得だけをめざすのではなく自分なりに考える力につながる基礎的な力が大切であること ③ダメなマイナスイメージの自分をこわし、自分もまんざらではないという自己肯定感を身につける」とが青年期の課題であること ④ LD



やA D H Dなどの生徒が、自分の障害を理解することは、「自分づくり」や葛藤を乗り越える場面でがんばる力につながること ⑤子どもに必要な教育を組み立てる、子どもの側から学校をつくる民主的な学校づくりのチャンスととらえること ⑥保護者が学校に対して要求し、学校が応えるという契約の関係ではなく、保護者と共同・連帯でつながること ⑦高校の中で個々の力量で何とかしようとするのではなくみんなでどうしていくかを考えることなどの発言がありました。

特別なニーズをもつ青年期の人たちにとっての学校とは何か、高校での特別支援教育のあり方など、今後の実践や運動の足がかりを見つけることができました。

### 《討論の柱》

- (1) 高校生が抱える悩みや要求について議論を深め、子ども・青年観を深める。
- (2) L D、A D H Dなど、さまざまな困難を抱える子どもの発達課題と進路問題を考える。
- (3) 子どもの願いや特別ニーズに応える教育条件整備の内容とその実現の道筋を考える。

司会

小椋千寿子（岡山）

菊地 信二（北海道）

共同研究者

杉浦 洋一

（全教中央執行委員）

### 《レポート》

① 地域における特別支援教育のとりくみ

関原 文明（北海道）

② こんな生徒はいませんか？

谷口 藤雄（京都）

③ 高校教育の課題としての進路保障について

菊地 信二（北海道）

④ 一人ひとりのニーズを把握した

### 「特別支援教育」について

新井 英文（愛知）

## 1月 28日（土）

### 分科会

9:30～16:30

分科会		会場	日高教担当者
第1分科会	生徒参加、父母・教職員、地域住民共同の学校づくり、地域づくり	愛知県産業貿易館 本館5F特別会議室	北野
第2分科会	高校多様化、再編問題	本館4F第4会議室	工藤
		本館4F第3会議室	
		本館4F第5会議室	藤田
第3分科会	学力問題＜主権者教育、憲法・平和教育＞	本館B1第15会議室	加門
第4分科会	子ども・青年の発達課題と特別ニーズ問題	桜華会館	鈴木敏

### 父母・教職員交流会

17:00～19:00 (本館4F 第4会議室)

司会 若林 舞子（愛知公立父母連）

\*交流の柱

「父母の会」活動の交流と、全国ネットワークづくり

## 1月 29日（日）

### 分科会

9:30～12:00

前日と同じ（ただし、第2分科会は会場が変わります）

\*感想文を受付にお出し願います。

#### ◇ 宿舎

◆ サンハイツホテル名古屋

〒460-0003 名古屋市中区錦1-4-11 TEL 052-201-6011

◆ 名古屋丸の内東急イン

〒460-0002 名古屋市中区丸の内2-17-18 TEL 052-202-0109

## 2006年度高校教育シンポジウム要項

1月 26日（金）

**全体会** 18:00～20:30（兵庫県中央労働センター 2F大ホール）

17:30 受付

18:00～18:30

◇ 開会 司会  
あいさつ 岡田愛之助（日高教中央執行委員長）  
津川 知久（兵高教組執行委員長）  
太田 政男（共同研究者代表）  
課題提起 工藤 敏（日高教副委員長・教文部長）

18:30～20:30

◇ シンポジウム  
「貧困と格差の拡大の中での参加と共同の学校づくり、地域づくり」

コーディネーター  
浦野東洋一（帝京大学）

シンポジスト  
山本 賢司（村岡高校PTA会長）  
今井 典夫（村岡高校教員）  
高校生（村岡高校）  
高校生（村岡高校）  
新町 信幸（明石総選ネット）  
藤浦 享子（明石総選ネット保護者）  
岩崎 善行（明石北高校教員）

- ・シンポジスト発言
- ・フロアーディスカッション
- ・まとめ

\*司会閉会宣言

\*全体会のみ参加の方は感想文をお願いします。



発行・編集 日本高等学校教職員組合

〒102-0084 東京都千代田区二番町12-1

TEL03-3230-0284 FAX03-3230-1569

E-mail:nikkoky@nikkoky.zenkyo.org

<http://www.nikkoky.org/>

2007年4月